

蝦夷と古墳群 ～江釣子古墳群の世界を復元する～

弘前大学大学院 教育学研究科

教科教育専攻 社会科教育専修 歴史学分野

12GP206 田中 航也

<目次>

はじめに 蝦夷を採り上げた過程と本研究の展開	3
------------------------	---

第1章 緒論

1 節 研究の背景	
(1) これまでの蝦夷論	5
(2) 松本建速氏の「移住者論」	7
2 節 研究目的	9
3 節 解決への基本戦略	9
4 節 本論文の構成	9

第2章 江釣子古墳群の景観

1 節 江釣子と言う地域	10
2 節 遺跡の分布からの分析	12
3 節 五条丸遺跡の役割	14
4 節 江釣子周辺の遺跡と古墳群の関係	15
5 節 江釣子を築いた人々	17
6 節 村の形成と糧道	19
7 節 水田構築の条件-水道-	23
8 節 小括	25

第3章 移住者論をどうとらえるか

1 節 筆者の蝦夷論	27
2 節 移住者論と比較して-先住民と移民-	30
3 節 本研究のまとめ	32

終わりに-今後の課題と展望-	34
----------------	----

参考文献	35
------	----

謝辞	37
----	----

＜はじめに＞ 蝦夷を採り上げた過程と本研究の展開

私が蝦夷をテーマに取り上げようと思い立ったのは些細なことからである。大学院入学当初は、平安後期に東北に源平を凌ぐ一大勢力を築き上げた奥州藤原氏に興味を持ち政治・支配体制の面から東北が発展できた理由を探りたいと考えていた。

しかし、研究を進めるにつれて奥州藤原氏より遡ること400年、8～9世紀に全盛を迎えた「蝦夷」が東北の地で、「日本」とは別の世界を展開していた事を知り、さらに工藤雅樹氏の著書「歴史博物館シリーズ 古代の蝦夷 北日本縄文人の末裔」（河出書房新社1992年）に触れ、自分が小学生のころに学んだ「野蛮・遅れている」と言った蝦夷像が間違いであったことに気付かされたと同時に大きな衝撃を受けた。

後に、教育実習先で中学1年生を対象に蝦夷の文化・生活をテーマとした授業を行った際に多くの生徒が私と同様に蝦夷を野蛮な人々と考えており、誤った認識が脈々と続いている事に気づかされた。将来社会科教師を志す身としては、決して見過ごせない問題である。

蝦夷の先行研究を見てみると大きく分けて5分野（民族論・成立過程論・蝦夷呼称論・移住者論・社会構造論）に分類される。中でも斬新なものとして「移住者論」が挙げられる。松本建速氏は著書「蝦夷の考古学」（同成社2006年）で、蝦夷と呼ばれた人々が存在したとされる直前の時期（6世紀半ばから末）までの東北部の人口がほとんどなかったのに対し、それ以降急激に人口が増えた点に加えてそれまで使われていなかった地に突然集落が誕生した点を根拠に、人々が移住した結果であるとしている。

私は、この説に疑問を覚えた。従来は、6世紀の東北地方の温暖化による稲作が普及し、安定して食料が得られるようになったことが急激な人口増加につながったとされている。人口の急激な増加＝移民と単純に捉える事でいいのか。また、仮に移民であるとした場合、何処からやってきた者たちで、どのような事が目的であったのか。また、そもそも蝦夷と言う表現は、ヤマト王権が自分たちから見て自らに従わない東北部の人々につけた蔑称である事から、もし蝦夷の文化を移住者らが築いたものであるとしたらもとは自らの住民を否定する事にもなりかねないのではないかと思われる。

それらを解決まで導くためにはまず、蝦夷たちの生活がいったいどのようなものであったかを考える必要がある。しかし蝦夷の生活といえども、広大な北東北の地でどの地域でも均一な生活水準であったとは考え難い。そのため本研究では、蝦夷世界の中でも最も栄えていた地域の1つである「北上川流域」に着目し、その中でも最大級の規模の古墳地帯である「江釣子古墳群」の景観をできる限り復元する事を中心とし、私なりの蝦夷論を確立する事が急務だと考える。

以上より、本研究では蝦夷社会の構造、その地に暮らしていた人々の考察する点が1つ。そして、自らの蝦夷論を踏まえて移住者論の可能性を探る事を目的である。いかんせん未熟者のため不十分な点が多く存在するが、本研究を通して少しでも蝦夷について正確なイメージを持てただけなら幸いである。

<第1章> 緒論

1 節 研究の背景

(1) これまでの蝦夷論

東北地方に住んでいると蝦夷という言葉は誰しもが耳にした事があるであろう。しかしはじめにでも示した通り、実際の所は蝦夷に関して何となく知っている程度で、どのような事が研究され判明されているかはまだまだ周知が低いものと思われる。そこでまずは蝦夷研究の過程について整理を行う。

八木光則氏によると、蝦夷に関する研究は大きく分けて5分野（民族論・成立過程論・蝦夷呼称論・移住者論 社会構造論）に分類されるとしている（八木 2010）。先行研究の始まりは民族論であり江戸中期の新井白石や本居宣長らが提唱した「蝦夷アイヌ説」であると言われている。「蝦夷アイヌ説」とは文字通り「蝦夷＝アイヌ」の考え方であり、古代東北～北海道にかけて現在のアイヌの祖先が暮らしていたとされており、「日本人」の直接的な先祖ではないと考えられている。

これは「日本書紀」に書かれている野蛮なイメージがそのまま受け取られたものであり、明治でもこの説は支持されている（背景に天皇制の国民への浸透を進めるためと考えられる。）。しかし、大正以降になると「石器時代原日本人説」が打ち出されることで「蝦夷非アイヌ説」若しくは「蝦夷辺民説」が提唱され始める。この説は、古代東北に住む蝦夷は文化的にも人種的にも「辺境に住む日本人」でありアイヌとは直接の関係を持たないとしている。（工藤 2000）

戦後になると考古学の技術発展により蝦夷が農耕をおこなっていた事実が明確になるとその動きはますます加速する。「記紀」の記述も批判的に解釈されるようになり、結果、石上英一氏による「擬似民族集团的呼称論」や高橋富雄氏による「まつろわぬ方民」、関口明氏による「反体制的な存在」と言った、「蝦夷非アイヌ説」を押す説が提唱されるものの完全な決着は未だについていない状況である（工藤 1998）。

成立過程論では、「記紀」等の文献から熊谷公男氏が、581年の敏達朝の服属儀礼記事を参照に6世紀から6世紀半ばであるとし、簗島栄紀氏は、熊谷氏の説に加え589年の崇峻朝の蝦夷国境観察記事を踏まえて6世紀後半から末であるとしている。どちらにしる6世紀という点で一致している。一方で高橋崇氏は、福島浜通り・阿武隈川流域に陸奥の分布を求め、そこからヤマト政権に組み込まれた事を示す「国造制」に着目し、これをさらに今泉隆雄氏により、「国造制」に組み込まれるとヤマト側の支配地であり、城柵や柵戸の設置はされているものの「国造制」に組み込まれていない地域を蝦夷の暮らす地と定義づけた。また、西野敦氏は「国造制」の分布と前方後円墳の立地条件が重なることに着目しこの説をさらに強めた。

蝦夷呼称論では「俘囚」「蝦夷」「夷俘」の様に使い分けがあったとされており、平川南氏によると「夷俘」は、ヤマト朝廷に服従を誓い、現地にとどまり従来の族長として村を支配した者をさす言葉であり、また古垣玲氏によると「俘囚」は地縁関係を失い、個人単位で帰属した蝦夷をさす言葉とされている。又、「蝦夷」の言葉自体は、個人・集団と選ばれる事無く、個人の身分表記・地域集団・一般的な用法としての3種類で使用されていた。

移住者論に関しては主に北海道で発見された末期古墳の被葬者の事を指して「移住者」としている場合が多い。だが最近になり東北地方で語られたものが提唱され始めそれが、松本建速氏の説である。氏の説は、東北地方の移民について本格的に提唱を行った最初の人物の様で現在の蝦夷研究の中では浸透されていない。次節で、氏の移住者論がどのようなものなのか整理を行う事とする。

最後に、社会構造論では工藤雅樹氏が「村」という単位が蝦夷社会の構成単位であるとし、「英雄」とたとえられた族長に率いられて「村」単位での同盟や対立など独自の行動をとっているとした部族制社会を提唱している。また、工藤氏によると幾つかの村が同盟関係にある場合は比較的緩い結合であるとし、これが「夷を持つて夷を制する」としたヤマト朝廷の戦略を可能としている。一方では同盟関係が広がる事で大きな緩い結合が誕生し、結果としてヤマト朝廷との三十八年戦争時にはアテルイやモレと言った族長をさらに束ねる「真の英雄」が誕生し蝦夷を率いる要因にもなった。このように、蝦夷社会は部族制社会の中でも最終の段階までは到達し

たものの、「英雄」が国家を建設するところまではいかなかったと工藤氏は分析している。（工藤 2000）

このように、蝦夷研究は多岐にわたり行われている一方で、民族論や移住者論、社会構造論ではまだまだ解明されていない不明な点が多く存在する。本研究では蝦夷研究でも新しい説として注目されている移住者論に焦点を当て移民の可能性を探っていく。そのため、まずは松本氏の説の整理から始めていく。

（2） 松本建速氏の「移住者論」とは

松本氏はどのような切り口で移住者説を見ているのか。著書「蝦夷の考古学」によると、蝦夷の古墳群から良く発見される馬具や土師器と言った物質文化に着目し、そこから浮かび上がる人の動きを通して蝦夷の正体に迫っている。

松本氏の物質文化を資料として人間を考える方法の基となっているのが次の2式である。

第1式 人間＝時間※空間※物質文化

第2式 物質文化＝自然※社会 ※は×と同意義

この2式が示している内容として松本氏は、考古学的考察の対象となる物質文化には、人間に関わる面だけでなく、自然としての面があり、それを基に人間を考える際にはその自然面を考慮する事でより広く、深い考察が可能であるとしている。

例えば、江釣子古墳群で多く発掘される土師器や須恵器と言った「土器」は人間の側（社会と表現されている）からすると、墓としての役割等人間にとっての形態・大きさ・デザインなどの表面装飾などを持ちうる一方で自然の側に立つて考えるとそれはある場所の粘土を固めた物でしか役割を持ち得なくなる。

また土器は人一人ひとりが作ることで場所や時代、材料によって微妙に変わってくる。その違いを通していくと一つのテーマで共通点が浮かび上がる。その共通点を区別する事で相互の関係を導いていく。

こうした手法の下で松本氏は、馬・鉄・土器について着目し、そこから3つの移住の波がある事を示している。1つめの波は5世紀末から6世紀初頭に東北南部（仙台以南）から、東北北部の東側に向かうものとしている。ただ、この移住は継続的なものではなく後の蝦夷世界を切り開くものではないとしている。

本格的な移民の波が押し寄せるのが7～8世紀、遺跡数の増加の仕方から継続的に行なわれていたものとしている。江釣子古墳群の発展もこの時代に当てはまる。

第1、第2波に関しては冷涼な東北北部でも東側（岩手県側）への移住が主でその人々も、農耕を目的とした農民ではなく、雑穀栽培と馬飼を生業とする人々が主である。特に第2波は先住民の数を凌ぐほどの移民が断続的にやってきている。その理由として挙げているのが沈線で文様を描く土師器の時代的な数の減少で、急速な減少から先住民の移民文化への同化が始まったとしている。

第3波は東北北部でも西側（秋田県側）への本格的な移住が始まり多くの集落が開かれた。目的は稲作を中心とした生業を持つ集落の造営と考えられている。この事が結果、秋田県北部から津軽平野にかけての日本国への編入、そして今まで曖昧だったエミシとエゾの区別が明確になった時期であるとしている。

のちに、5世紀から11世紀にかけての3つの波は結果として大量の移民者は先住民を短期間で凌駕するに至り、結果として先住民が移民文化に同化する事で移民による全く新しい世界ができたと結論づけている。

松本氏のこの論にはうなずける点が多くある。しかし、先住民の存在が消されてしまうほど先住民たちの文化はもろいものなのであろうか。移民文化はそれほどまでに影響力のある文化であったのか。疑問は尽きない。しかしそれを考えるにはまず筆者自身が蝦夷の世界を持たなくてはならない。次節では、具体的な目的や方法を述べていく。

2 節 研究目的

本研究の目的は、まず自身で蝦夷世界を復元し自分なりの蝦夷論を持つ事を挙げる。そして、自身の持つ蝦夷論と松本氏の移住者論を比較し、より深い蝦夷論を展開する事を最終目的とする。

3 節 解決への基本戦略

この論文の骨格となる点は、自分の蝦夷論を持てるかどうかである。そのためには考古学の発掘調査の結果にふれ、そこから蝦夷の村を復元する事を行う。事実としては1つの事であっても、その個人の見方や時代背景、物との関係で見えていくと大きく違った見方になりうることも十分にある。最終的には、復元マップを作成し、どの様な世界が広がっていたのかを分かるようにする。

また、本研究では、北上川流域でも大きく発展し、また比較的発掘が盛んに行われているが、景観復元がさほど行われていない岩手県の江釣子古墳群に焦点を当て、発掘調査を見ての紙面上にとどまらず平成 26 年 10 月を中心に数回実施を行った現地調査の結果をかねて実際にその地を見てオリジナリティある復元を試みる。

4 節 本論文の構成

本論文は第 1 章で、蝦夷に関する先行研究と松本氏の移住者論について物質文化を捉える方法を中心に示した。

第 2 章では、筆者自身の村の復元を多角的な面から分析し行うことで、蝦夷論を確立した。

第 3 章では、移住者論と自身の蝦夷論を比較し、問題点を挙げ解決を図ることでより深めた蝦夷論の考察を試みた。

以上 3 章で本研究は構成されている。

＜2 章＞ 江釣子古墳群の景観

1 章では、蝦夷の成立過程論、松本氏の提唱した「移住者論」について振り返りを行い、筆者の抱く問題点を提起した。

この章では主に江釣子遺跡群発掘調査書（江釣子村教育委員会 1980 他）を用いて筆者が作成した江釣子古墳群復元図案（別途資料 図 A）と江釣子古墳群周辺図（別途資料 図 B）から読み取れる、江釣子古墳群の景観を分析していく。

1 節 江釣子と言う地域

江釣子古墳群はどのような場所なのであろうか。現在のこの地について抑える必要がある。江釣子古墳群は、現在の岩手県北上市の西部（旧江釣子村）に位置する。土地は平坦で山は無く、西と南は和賀川が流れている。和賀川は、多くの支流を加えて北上平野を南流する北上川と合流している。（江釣子村教育委員会 1980）

江釣子古墳群は東から八幡古墳群・猫谷地古墳群・五条丸古墳群・長沼古墳群の4つの支群から形成されている。この中で長沼古墳群のみ他3古墳群より西に4.4キロ離れた地（現 和賀東中学校）に存在している（地図 B 参照）。本研究では、蝦夷の生活・景観の復元に重点を置いているため、ある程度範囲を絞って行う必要がある。

そのため、今回は長沼古墳群を対象から外し隣接し合う3遺跡を対象に分析を行う。（以後、江釣子古墳群と表記する際は、八幡・猫谷地・五条丸を対象とする。）さらに復元の対象時期は7世紀末以降9世紀初頭までとする。

群集墳として著名な猫谷地・五条丸は和賀川自然堤防上に、八幡古墳群は金ヶ崎段丘上に立地している。和賀川との標高差は平均して約5m。現地調査を行った際に水害を受けにくい比較的暮らしやすい地域であるとの印象を持った。

ここから、江釣子古墳群復元図案（別途資料 図 A）を用いての分析に入る。まず図 A は主に、古墳の場所・発掘された住居跡の場所・湧水・筆者が推定した水田の場所について示されている。これらから考察される事について順を追って説明する。

2 節 遺跡の分布からの分析

まず、各遺跡における古墳の数と竪穴住居の数に着目する。古墳の数においては五条丸で 68 基、猫谷地では 20 基、八幡では 8 基と約 70% の数が五条丸地域集中していることが分かる（北上市立博物館 1998）。一方の竪穴住居数では 6 世紀から 10 世紀までの住居として発掘されたものを見ていくと、五条丸は 1 棟（江釣子村教育委員会 1981）、猫谷地では 25 棟（北上市立博物館 1998 他）八幡では 18 棟（江釣子村教育委員会 1984）が確認されている。ちなみに時期については、

図 A では「1 期から 5 期」に分類されている（江釣子村教育委員会 1984 88 他）。1 期は 6 世紀～7 世紀中頃、2 期は 7 世紀中頃から 7 世紀末。3 期は 8 世紀全般、4 期は 9 世紀末まで、そして 5 期は 9 世紀末から 10 世紀とした。

これは以下に示す表 2-1 にそれぞれ対応している。

表2-1 江釣子古墳群における集落の変遷(6世紀～10世紀)							
年代	6C		7C末	8C		9C	9C末～10C
集落	猫谷地Ⅰ期		猫谷地Ⅱ期		猫谷地Ⅲ期	猫谷地Ⅳ期	猫谷地Ⅴ期
		八幡Ⅰ期			八幡Ⅱ期		八幡Ⅲ期
		五条丸	五条丸古墳群の形成				
			塚Ⅰ期				
地図での区分	1期		2期	3期		4期	5期

以上の結果から 2 つの事が浮かび上がる。

- ① 猫谷地、八幡では古墳と住居がセットで存在している。
- ② 五条丸では古墳群のみの形成となっている。

特に猫谷地では、6 世紀から 10 世紀にわたって比較的長期にわたって集落が存在している事と古墳成立年代が 7 世紀以降のものであるという点から、古墳は代々猫谷地Ⅱ期以降の長、若しくはそれに関わる人々の古墳である事が予想される。これは、集落存続の時期は猫谷地よりも短いものの、9 世紀以降の八幡でも同様の事が言える。

さらに、古墳と住居の位置関係に着目すると住居域と古墳域での境界が密接になっていることが分かる。

しかし、一方の五条丸では3遺跡の古墳合計のうちの約70%を占めるが竪穴住居跡の発見数が猫谷地・八幡に比べて圧倒的に少なく、当時五条丸で生活していた住民の古墳であるとするには、あまりにも不自然である。

では、どうして五条丸は一大墓地と化したのか。また、五条丸の古墳の埋葬者はどのような人々であったのであろうか。次節で検討を行う。

3 節 五条丸遺跡の役割

そもそも五条丸は、なぜ一大墓地となったのであろうか。この点を解くカギが地形にあると考えられる。理由の一つに挙げられる点として五条丸北部に湿地帯が形成（江釣子村教育委員会 1985）されていた事が考えられる。この地が江戸時代に行われた新田開発に利用された点（北上市立博物館 1998）から、畑作等に適した地盤が不安定な湿地帯であったと推測され、リスクを冒してまで住居を建てる事は無いだろうと思われる。さらに地形に注目すると、北は湿地帯、西・南を和賀川にはさまれたこの地は集落拡大には不適である事が想定される。一方で、湿地や、約 5m の自然堤防と言った地形が外部の侵入を妨げていると思われ、結果この地を安全な地と考えられる事に繋がる。ゆえに一帯を一大墓地とする事に至ったとも推測される。

一方で、古墳の埋葬者については、住民の古墳ではないとすると、考えられるパターンとして 2 つ挙げられる。

- ①猫谷地若しくは八幡の住民の古墳である場合。
- ②周辺地域の集落の長や関わる人々の古墳である場合。

まず、①について筆者は否定的な考えを持っている。前節でも述べたとおり、猫谷地でも八幡でも住居の近くに古墳がセットで存在している事を考えるとわざわざ五条丸において古墳を立てる必要は無い。ましてや、長クラスでないとこの古墳には埋葬されない事を考慮すると 7 世紀以降、猫谷地・八幡合わせて 70 人もの長が誕生する状況になるとは考え難い。また、図 A からわかる通り、猫谷地・八幡共に古墳を建設する土地は既存の古墳を建てた他に、十分に存在しているため追加を行う必要がある場合はそちらの方に建設するのが自然である。そのため、②に関する場合の方が現実的である事から、以降そちらの方の考察を行う。

4 節 江釣子周辺の遺跡と古墳群の関係

ここからは、図Bを利用して詳細を分析する。江釣子古墳群の周辺には7世紀以降の遺跡が多く存在する。まず、五条丸より400mほど北に塚遺跡が存在する。この遺跡からは主に11世紀の遺構が発見されているが、8世紀代の竪穴式住居が1棟だけ発見されている（江釣子村教育委員会1980 81 85）。比較的大きな建物であり、1棟だけ存在する不自然な点から考えると当時は集落を形成していた事が想定される。また、塚遺跡から東に目を向けると本宿羽場遺跡、本宿遺跡が存在する。本宿羽場遺跡でも、8世紀代の竪穴式住居が2棟（江釣子村教育委員会1978）、11世紀代とされる竪穴式住居が13棟発見されている。8世紀代の住居数は少ないものの、11世紀代の集落が発見されていることから8世紀以降集落が続いていることが想定される。

また、本宿遺跡は主に縄文期の遺構が発見されている地域であるが、平安初期の遺構として掘立柱建物、年代の認定が難しいが古代期の遺構として竪穴式住居3棟が発見されている（（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992）。さらに本宿遺跡から東北自動車道沿いに北に目を向けると上藤木遺跡・下谷地遺跡が存在する。どちらも年代が明確でない点がネックではあるが、江釣子古墳群と同時代に集落が存在した可能性をうかがわせる。五条丸遺跡から東には鳥海柳遺跡が存在している。鳥海柳遺跡は7～9世紀の集落跡が発見されているとされている。（遺跡ウォーカー2014）

そしてこれらの遺跡に共通する事項として族長を埋葬するような積石塚古墳が見つかっていないことが挙げられる。このような周辺集落の族長クラスの共同墓地と考えると五条丸の古墳の多さは納得できる範囲となる。

しかし、猫谷地・八幡のように自らの集落に隣接した地域に古墳を建設する事が普通ではなかろうか。事実、そちらの方が管理の面でも手厚く行える。わざわざ遠く離れた五条丸に建設するメリットが、建設時に使用する川原石の調達が便利であること以外に見当たらないのである。では、なぜそこまでして五条丸に古墳を建設しなくてはならなかったのか。筆者は、猫谷地集落を中心とした集落連合の可能性を考察する。

根拠として挙げられるのは、7世紀後半に猫谷地に存在した族長のとされる竪穴住

居を含む集落 5 棟（北上市立博物館 1998）にある。図 A でもひととき大きく記されているが、この竪穴住居は他とは比べ物にならないほどの大きさである。通常、一般の集落は 10～20 m² の大きさであり 30 m² を超えると大型住居に分類される。しかし、この竪穴住居に関しては 1 棟で 130 m² にもなる。これは、同時代の遺跡で大規模な遺跡に位置づけられている水沢市の今泉遺跡でも族長クラスの竪穴住居で 40 m²、同市膳性遺跡での族長クラスの竪穴住居は 86 m² と他の集落に比べても猫谷地の住居の大きさは十分である（細井ら 2009）。族長がこれだけの住居を構える力量がある事を考慮すると猫谷地集落がこの地域の盟主的な存在であると考えられその影響力は、かなりの物であったと推測される。

恐らく、猫谷地を中心とした連合はお互いが連合に属する証として五条丸に古墳を建設するようになったのではないかと考えられる。そして、盟主的存在である猫谷地は他集落とは一線画する形で自分たちの集落と隣り合わせで古墳を建設した。ところが、ここで 1 つ、例外が発生する。八幡の存在である。なぜ八幡だけが猫谷地同様集落の近くに古墳を築く事が可能だったのだろうか。今度は、江釣子で暮らしていた「人」に着目する必要がある。

5 節 江釣子を築いた人々

集落近くに古墳を築く事が可能であった八幡にはどのような人々で構成されていたのであろうか。まず考えられるのは、猫谷地の族長の一族を中心とした大規模な「分村」である。表 2-1 に示した通り八幡が発展したのは、八幡Ⅱ期の 9 世紀初頭とされている。分村となる条件としては、猫谷地Ⅱ期からⅢ期の間、8 世紀前半に急激な人口増加が発生して猫谷地地域では収まりきらなくなる点が挙げられる。

ここで仮に、集落内に限定した人口増加を考えてみる。期間に当たる約半世紀、人口構成比で子づくりが可能とされる年齢層が多く存在したとする。10 代後半で次世代を担う子どもが誕生すると仮定してもその波は多くて 2~3 回。さらに現在よりも乳児死亡率が高い当時は、誕生したとしても生まれた子どもたちが次世代を築くまでに無事に成長できると言った極めて好条件がそろった条件で無いともともと住んでいる人々だけで人口が増える事は考え難い。そこで考えられるもう一つの可能性は、松本氏も掲げている移民による新たな集落の建設である。

移民として来る場合、個人で来る場合よりも一家で若しくは一族など集団での移動が多い。そうした集団を受け入れる側に当たる集落は進んで受け入れると言うよりはむしろ拒む方向にある。これは、現代でも同様な事例は見られ、農村集落に入っていくとよそ者はなかなか受け入れられないと言った現象に似ている。

しかし、猫谷地の集落は全面的に拒否した事ではないようである。例えば、八幡Ⅱ期の集落の住居プランが猫谷地Ⅱ期の族長クラスの竪穴住居と同じ流れを組むものである。特徴としては、北壁中央にカマドを持ち、煙道がトンネル式である点。また、住居南壁中央が張り出していると言った特徴を持つ点が挙げられる。(江釣子村教育委員会 1984)

さらに、移民と考えられる要素の一つに、古墳と古墳からの遺物が挙げられる。江釣子古墳群の遺物として独自のものとして蕨手刀がある。しかし、蕨手刀の約 8 割が東北北部で発見されているため、「蝦夷の刀」と呼ばれている程のものである(八

木 2010)。これでは、移民と考えるのは難しい。だが、蕨手刀の他に良く発掘されるものの中に「馬具」が存在する（北上市立博物館 1998）。馬具が埋葬されていることから馬を飼っていた人々がこの地に住んでいたことが明確である。そこで注目すべき点として馬飼いの墓が川原石積み古墳であることだ。

「延喜式」によると古代の牧として発達していた地域が上野国、信濃国、武蔵国であるとされている。そして、現に積石塚の古墳の所在地を見ていくと、それらは甲斐・信濃・上野・武蔵・宮城県北部そして岩手県域と言った地域が挙げられる（松本 2006）。さらにここで蕨手刀の分布も見ていくと先ほど申した通り、全体の 8 割は東北北部であるが、残りの 2 割の存在がやはり信濃・上野・甲斐・武蔵・そして北海道へと分布されている（八木 2010）。

馬具・古墳・蕨手刀の分布の面で、江釣子古墳群との共通点を見ていくとやはり、信濃・上野・武蔵と言った関東地方にぴったりと当てはまる。馬術の文化が高句麗から伝来されて徐々に東へと広がっていったため、関東地方に先に伝来されたものと考ええる。以上から、江釣子の馬文化も関東地方からの移民からもたらされたものと考えられる。五条丸・猫谷地の古墳群が 7・8 世紀のものである（北上市立博物館 1998）事から、やはりこの時代に移民がはいってきたと考えても違和感はないと思われる。

6 節 村の形成と糧道

人間が生きるのに必要な要素として衣・食・住が基本であると言われている。中でも食は自らの命をつなぐためには絶対に無視できない必要不可欠な項目である。

6 世紀以降の温暖化により、寒冷で稲作が不適とされていた東北地方でも農耕を中心とした世界が展開されるようになった（工藤 2000）。特に、数ある蝦夷集落の中でも発展した地域の 1 つであるここ江釣子でも当然稲作が行なわれていた可能性はあるとされている（辻 1996）。そこでこの項では、江釣子遺跡での稲作の可能性を探る。そこから、人口の規模や自然環境について展開していく。

安藤氏によると、水田面積を推定するに当たっては次の 5 つの条件（変数）を仮定する必要があると定めている。（安藤 1992）

- ① 集落の人口
- ② 1 人あたりの一日に必要なエネルギー量
- ③ 水田のコメ生産量
- ④ 玄米の単位当たりエネルギー量
- ⑤ 当時の食性に占めるコメ食の比率

以降、安藤氏の定義に沿って水田の広さを求めていく。

まず① 集落の人口を求めていくのだが、その時に参考になるのはここで図 A を利用する。図 A には、先ほども紹介した通り発掘調査報告書などから古墳の位置と住居跡の位置をまとめている。安藤氏が人口を求めるにあたって特に重要視しているのが「住居の連続的重複」であるとしている。竪穴住居が存続する目安としておおよそ 20 年とされている。つまり 1 世紀その集落を存続させるには少なくとも 100/20 で 5 件必要であることが分かる。

江釣子の場合、住居が複数発見されている 7 世紀末（2 期）から 10 世紀初頭（5 期）までのあいだに 47 件の住居跡が発見されている。

このことから、1 世紀あたりの平均住居数は

$$(47 \div 5) \div 3 = 3.1 \dots$$

となり、平均 3 世帯となる。この値に場合によっては 1 若しくは 2 世帯ほどの誤差は十分に考えられる。また、住居あたりの住民数に関してだが現代の様な核家族ではないと考えられるため、多すぎず少なすぎず平均 1 件当たりを 5 人と仮定する。そうすると 1 世紀通じて平均 15 人から 20 人ほどの集落が存在していた事になる。

次に② 1 人あたりの一日に必要なエネルギー量を試算する。

しかし、試算するとはいえ当時の蝦夷たちが一日当たりどれだけの食事をしていたなどと言う細かなデータは現在の資料からでは導き出す事が不可能である。安藤氏は、幕末、明治期の日本人、そして弥生人と条件に近いとされる海外の未開狩猟民族のカロリー一例を挙げ、それぞれが 1800～2100kcal と現代人とさほど変化が見られない事から弥生人の 1 日の平均摂取カロリーを 2000kcal と仮定している（安藤 1992）。そのため、ここでは 1 日のカロリーを 2000Kcal として試算する。

③ 水田のコメ生産量に関しては、主に 3 つの方法があるとされる。

- I 現存の初源的な水稻耕作を営んでいる民族の生産量を根拠とし、コメ生産量を仮定する。
- II 文献からの推測
- III 実際の弥生時代の水田跡に残された稲株の密度・穂についているもみの数から計算する方法。

I の場合においては、インドネシアで栽培されている初源的な水稻耕作を紹介しており、そこでは 10 a 当たり 100 kg の収穫が行なわれているようである。しかし、インドネシアが、常に高温多湿の熱帯地域である事を考慮すると寒冷化を脱却した東北北部を同様に考える事は矛盾が生じる事となる。

また一方で II の方面では、沢田吾一氏の「奈良朝時代民生経済の数的研究」を採り上げ、奈良時代の水田が収穫量に応じて上田・中田・下田・下下田の 4 品等に分類されていることを示している。それぞれを一町歩当たり、500 束（106 kg）・400 束（85 kg）・300 束（64 kg）・200 束（32 kg）の収穫量としている。

さらに III の方面から、寺澤薫氏・知子氏により弥生時代中期で下下田から下田クラス、後期に至っても下田から中田クラスが主体とする結果が出された事を受けて、安藤氏は 10 a 当たり 40～60 kg の収穫量が妥当であるとしている。

気候面から考察して、6 世紀の温暖化は必ずしも一時的なものではない為江釣子でもこれほどの収穫は十分見込めると考えられる。

④ 玄米の単位当たりのエネルギー量は 100g 当たり乾燥状態で 350Kcal。炊飯した場合だと 100g 当たり 165kcal である。

⑤ 当時の食性に占めるコメ食の比率

当時の食生活として農耕と狩猟のハイブリッド型の生活を行っていた（工藤 2000）とされており、かつ炭水化物が豊富に含まれているためエネルギー源として重宝されたと考えられる。また、狩猟と違いある程度安定して供給できる点から摂取カロリー全体の 5 割ほど（1000Kcal）食されたと考察する。

以上、①～⑤の条件の下で、当時の水田面積を考察する。水田面積を求める計算式としてまずは、人間 1 人が 1 日あたりに摂取するコメの重さを算出する。

$$\begin{aligned} 1 \text{ 人あたり食するコメの重さ} &= \text{摂取カロリーの 5 割} \div 100\text{g 当たりの玄米カロリー} \\ &= (1000 \div 350) \times 100 \\ &\div 290(\text{g}) \end{aligned}$$

$$\text{面積}(\text{a}) = 1 \text{ 人あたり食するコメの重さ}(\text{g}) \times \text{人数} \times 365 \text{ (1 年間)} \div 1000 \div \text{水田のコメ収量}(\text{kg}/10\text{a}) \times 10$$

以上の計算式にしたがって、①で求められた条件下の場合での試算を行う。

i 人数 15 人 コメ収量 40 キロ

ii 人数 20 人 コメ収量 60 キロ

i の場合

$$\begin{aligned} \text{面積} &= 290 \times 15 \times 365 \div 1000 \div 40 \times 10 \\ &= 396.9 \text{ (a) つまりは } 39600\text{m}^2 \end{aligned}$$

ii の場合

$$\begin{aligned}\text{面積} &= 290 \times 20 \times 365 \div 1000 \div 60 \times 10 \\ &= 352.8 \text{ (a) つまりは } 35200 \text{ m}^2\end{aligned}$$

ここから、20 人を年間で賄うためには 100m×350～400m程の土地が必要となってくる事が分かる。そこで筆者は、水田の位置を日当たりのいい南側である和賀川自然堤防上にあると推測した。推定した面積は約 94000 m²（地理院地図）である。（図 A・B 参照）

広さの面で考慮しても十分に賄えるほどの土地が広がっている。

しかし、灌漑設備はどの様に行ったのであろうか。次に、その点についての考察を行う。

7節 水田構築の条件 -水道-

当時の技術では人間が自力で川の水を引く技術は存在せず、比較的流れの激しい和賀川からの水引は不可能と考えられる。つまり、簡単な方法で水を確保する必要がある。そこで考えられるのが、湧水である。

図 B を参照して欲しい。ここには、湧水とその湧き出るポイントとして「すず」を示している。この湧水は、新生代から存在しているとされており扇状地末端の崖又は河川が、扇状地の一部を削ってできた直線状の崖の所には至る所に存在している。北上市内には約 230 の「すず」が存在し、江釣子一帯は和賀川に平行して自然堤防上に湧水が流れている。

実際、「すず」は今でも水資源として北上市民の生活を支え、また人々の憩いの場としても重宝されている。例えば、ワサビ田や、芹田、鯉の養殖そして、水田にも利用されている。(図 2-1)

江釣子古墳群から近くの「すず」はやすらぎの泉と、桂清水である。ここでは水質調査が行なわれていて、やすらぎの泉は毎秒 1.0 リットル、水温は 18.7℃と水田の水にするには比較的暖かい。また、桂清水は、毎秒 3.3 リットル、水温は 17.8℃である。参考として、湧き出る水量が毎秒 1.0 リットルある湧水では、30a の水田 1 枚を灌漑できるとされている。(北上市立博物館 2008) 仮に、やすらぎの泉からの湧水のみを利用して 30a 分の水田を展開する事が可能で、同様に桂清水のみでも 90a 分の水田が展開可能となり、計 120a 分は「すず」から直接水を引くだけでも確保可能である。しかし、江釣子古墳群よりも上流にあたる位置にため池を作りより多くの水を水田に導入する工夫を行うことでより広い地域の灌漑を行う事が可能となる(図 2-2)。恐らく、6 節でも論じたとおり、蝦夷たちが暮らしていくのに最低でも 350～400a の水田が必要である。行われたと考えて不思議ではない。

一方で、水資源が確保されたとしても稲が成育できないようでは意味がない。ここで、稲の生育に必要な条件の一つである温度を見ていく。稲は、春に種をまいて発生する「発芽」に始まり夏から秋にかけて「出芽」「活着」「葉の伸長」「分げつ」「幼穂の分化・形成」「開花」「登熟」と言った段階を順調に経て秋に収穫を迎え、食料となる。それぞれの段階では発生するのに必要な温度が条件となっており例えば、稲が

発芽するために必要な温度は、最低限必要となる限界温度で 10°C 。出芽から登熟までも最低温度でも 12°C から 16°C に保たれている必要があり、開花に至っては 22°C 必要である（日本土壌協会）。開花に至っては夏真っ盛りに行われる為、6 世紀以降の温暖化により心配は無いと思われるが、その他の点でも、やすらぎの泉・桂清水両方の水温が平均で 18°C 以上に保たれているため、成長過程でも特に大きな問題なく成育は行われると考えられる。

また、水田を安定的に展開させるには水源の安定的な供給も必須となってくる。その点に関しても「すず」は条件を満たしている。例えば、金ヶ崎町上ノ町の「寒田清水（つみたすず）」の湧水は、大正 13 年に発生した大旱魃の際にも涸れることなく、その湧水を利用していた住民の窮地を救ったというエピソードが存在する（北上市立博物館 2008）。

これらの条件からもわかる通り、この地での水田の展開は十分に可能であったと考えられる。しかし、稲の成育温度からもわかる通り、温度の条件はあくまで限界温度をкаろうじて超える程度の分の温度でしか保証できない範囲である事から、他に輸出するほどの分の生産は難しく、自分たちが食べていく分のコメの確保で精一杯であったと考えられる。



図 2-1 芹田の景観



図 2-2 相去・成沢堤

（図 2-1・2 とも北上市立博物館 2008 より掲載）

8 節 小括

2 章を通して、村の復元を多角的な方向で行った。当時の江釣子地域はどのような風景が広がっていたのだろうか。ここで一度整理を行う。

まずは地理的要因から。「江釣子古墳群は、北上川の支流和賀川の自然堤防上に存在している。自然堤防上には広大な、肥えた土壌の沖積平野が広がる。和賀地方から続く湧水の流れがもたらす豊かな水資源に恵まれ、そこは水田に利用されている。そして、水田の北に広がる地域に集落が存在する。」

次に人の流れに着目する。「江釣子地域は猫谷地を中心に人が集まっている。周辺の地域では見られない 100 m²規模の竪穴住居が存在し、この地域を束ねる族長を中心とした集落が存在する。東には移民たちの集落として発展した八幡、西には族長たちの一大墓地である聖地、五条丸がそびえる。江釣子地域周辺には、塚や本町などの集落が存在し、猫谷地を盟主とした族長連合で結びついている。」

また、生活文化の面から見ていく。「この地域は移民を受け入れる事で馬飼の生産が始まり、それに付随して馬具や積石塚古墳と言った他の蝦夷地域では見られない高い技術を誇るようになる。結果、蝦夷の村々でも発展した地域となっている。さらに馬飼の技術は中世の時代に名馬を産出する地域となるその基礎となっている。

食生活に目を向けると、食器や保存・調理用のつぼに土師器を利用し、各家庭にはかまどが設置されている。南に広がる水田から収穫されたコメを主食とすると同時に、古来より行なわれてきた狩猟を組み合わせたハイブリッド型の食生活が展開されていただろう。」

以上が、分析を行って浮かび上がってきた筆者なりの復元結果である。

江釣子の蝦夷たちは、自然を最大限に利用する事により 300 年以上も続く集落をこの地に展開させた。そして、

- ①安定した糧道
- ②移民を介して新しい生活文化の導入
- ③猫谷地を中心とした各集落の連合による地域内の平和

と言ったこの 3 点が、豊かな生活をもたらした要因と考えられる。

しかし、あくまで発掘調査で確認されている範囲から推測される結果である。
そのため人口はこの江釣子地域でたった 20 人ほどでしかない中での推定である。地図からでもわかる通り、あれだけ広い地域であれば数百人単位での人口であっても不思議ではない。また馬具が産出されている事から、馬産の可能性をここでも示したがにもかかわらず厩や馬の骨が見つかっていない。まだまだ解明されるべき点は多く存在する。

これら今後の問題が解決される事でより明確な復元が可能となる。

＜第3章＞ 移住者論をどうとらえるか

第2章では、江釣子古墳群の復元を試み、そこに広がる蝦夷の世界をまとめた。

ここでは、第2章で垣間見えた筆者なりの蝦夷観を示した後に、第1章での松本氏の移住者論の可能性について言及する。

1 節 筆者の蝦夷論

第2章で行った分析より、江釣子地域で営まれていた蝦夷の暮らしが多分の推測も含まれているが、一通りの形としてその内容が明らかとなった。

第2章では分析によって明らかになった3つの重要なポイントを示したが、中でも

- ①移民を介して新しい生活文化の導入
- ②猫谷地を中心とした各集落の連合による地域内の平和

と言った2点に関して見ていくと、蝦夷の主な研究5分野（民族論・成立過程論・蝦夷呼称論・移住者論・社会構造論）として第1章で掲げた中では、移住者論・社会構造論に関して踏み込んだ論を展開できると考えている。

まずは、①についてである。そもそも積石塚古墳・馬具と言った古墳からの出土品は、馬飼が発達していた上野国・信濃国と言った関東・甲信地方でも同様な遺構が発見されていることに加え、乗馬文化が4世紀末に高句麗を介して西から伝わった事も考慮すると、先行研究でも言われている通り蝦夷独自の文化と言うよりは移民による文化の伝来であると捉えたほうが自然である。ここまでは、第2章でも述べたとおりである。

しかし、移民による文化が花開いたかのように蝦夷文化に浸透していったからと言って移民以前にこの地域に人々が住んでいなかったかと言うとそうではないと考えられる。あくまで先住民が移民を受け入れたのである。それを物語っているのが、岩崎遺跡の存在である。

岩崎遺跡は、猫谷地遺跡から南西に約4キロの地に位置し、和賀川支流の夏油川の右岸に発達した標高約100mの段丘崖沿いに存在する。現地調査で、遺跡があったと

される地域を訪れたものの遺跡の遺構を発見する事は出来なかった。だが、昭和 63 年以降に行われた発掘調査によると、周湟（溝）に囲まれた古墳が 7 基、土壌墓（墓穴）が 12 基発見されたとの報告がある（北上市立博物館 1998）。古墳の大きさは径 10m 以下で、周湟の南に入口があり、馬蹄形を基本としている。同様の古墳は、盛岡市上田蝦夷森遺跡など、青森県から岩手県沿岸にかけての遺跡で多く発見されている。

特に注目したいのが、古墳から出土された遺物である。続縄文文化の伝統的な石器であるとされている黒曜石製のラウンドスクレパー（皮なめしの道具）が、土師器や鉄器と一緒に副葬されていた。ラウンドスクレパーは主に東北北部・北海道の遺跡で発見されており、土師器も住社式と栗田式が主であり、これは 6 世紀前半から 7 世紀末ごろまでに東南北部で使用されていたものである（工藤 2000）。つまり岩崎遺跡は、6 世紀若しくは 7 世紀まで存続していた事を意味する。逆に、江釣子古墳群で発見された馬具や蕨手刀は一切出土されていない。また、岩崎遺跡が北と南の文化を兼ね備えた集落の存在も示している（北上市立博物館 1998）。

そこで、第 2 章で示した表 2-1 を確認する。6 世紀代の江釣子地域ではちょうど猫谷地Ⅰ期に相当し以降、移民流入以前の八幡Ⅰ期の集落存在期を経て、猫谷地Ⅱ期と続く。ここで言いたいのは、猫谷地Ⅰ期、八幡Ⅰ期の住民は岩崎遺跡と同じ流れを組んだ古来の住民であった可能性である点である。当時の江釣子地域でも岩崎遺跡と同様の文化を持っていたがそこに関東からの馬飼を中心とした移民たちがやって来て、江釣子地域は猫谷地Ⅱ期を境に変化していったと推測される（図 3-1）。

また仮に、移民によってもたらされたとされる積石塚古墳や馬具が技術交流等で伝搬した場合、直線距離で 4 キロほどしか離れていない岩崎遺跡でも同様な文化が見られても不思議ではない。

ゆえに、江釣子地域に移民がやってこないで積石塚古墳や馬具などの遺物が大々的に発見されると言った事態が成立しないと考えられる。

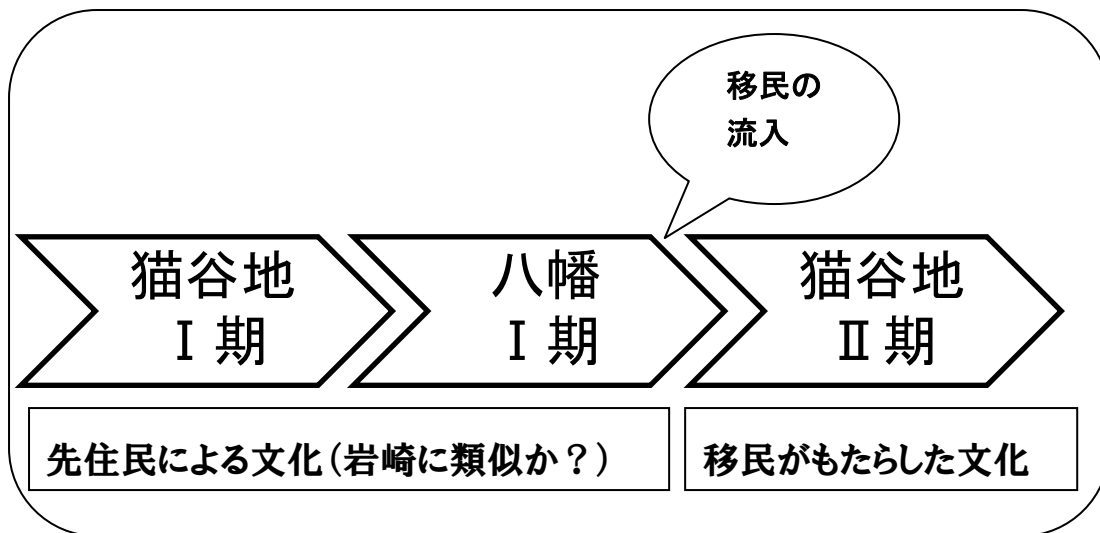


図 3-1 江釣子地域における生活文化の変遷

次に②についてである。第 2 章で、五条丸地域が一大墓地となった理由から猫谷地集落を中心とした族長連合（図 3-2）の可能性について述べた。先行研究では蝦夷の社会は内部対立の激しい社会である（工藤 2000）とされているが、果たしてそのような状況であったならば、五条丸の地に 68 基もの古墳が作られる事は考え難く逆に各集落で古墳をかまえるのが普通である。さらに、積石塚古墳は前方後円墳と言った巨大古墳に比べれば非常にコンパクトなサイズで人手をかけずに作ることができるが、それでも材料となる川原石は 1 つ当たり平均 2～3 kg。大きなものにもなると約 8 kg に相当し、さらに積み上げるためにそれに見合った石を集めなくてはならない等、人手も時間も十分に掛けないと完成しない。さらに争いが続いた地域でこれだけ多くの古墳が残されていることからある程度平和が保たれていた事によりもたらされた産物であると推測される。ただ、他地域との対立は十分に考えられる事である。

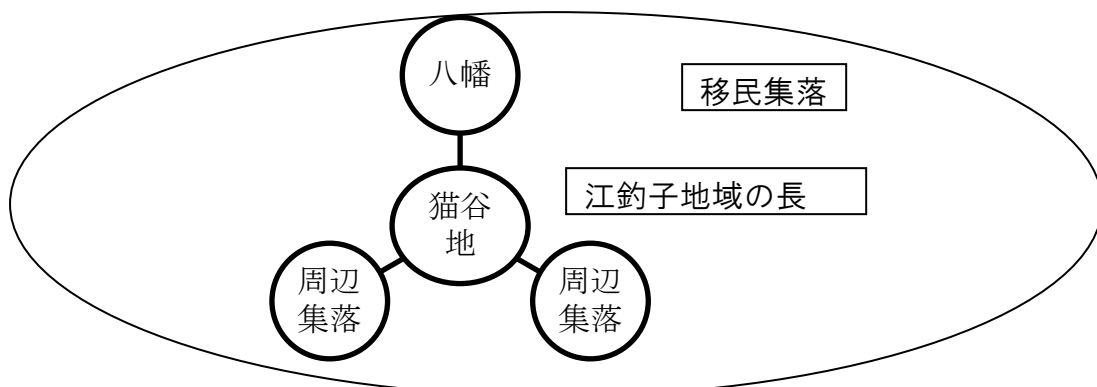


図 3-2 猫谷地を中心とした族長連合

2 節 移住者論と比較して-先住民と移民-

ここでは、自分が行った蝦夷論と松本氏の移住者論との比較を試みる。

まずここで松本氏の移住者論について確認を行う。第1章でも述べたとおり、松本氏はカマド付き竪穴住居と土師器を用いる生活様式をもつ人々の移動に着目し「南の地域から5世紀から11世紀にかけての3回の移住の波」があったと位置づけた。その結果、もともと人々の生活の根拠がなかったとされるこの地に大量の移民が入り込み、例えば、江釣子古墳群が大きく発展した7~8世紀では第2波に当たり、上野国や信濃国等の牧が盛んであった関東・甲信地域から馬飼を生業とした人々がやって来て笹やススキと言った黒ボク土地帯を生かしてこの地で馬飼技術を広げのちには蝦夷文化の代表的な物のうちの1つとされるようになった。

筆者の蝦夷論は先に述べたとおり、先住民が住んでいた地に移民が入り込んできて共存をするとともにその地域に適した文化を求めて選択淘汰が行われた結果として現在定義されている蝦夷文化が形成されたものと考えている。それゆえ、松本氏の掲げる移住者論の中でも、現在定義されている蝦夷文化が移住者によりもたらされた文化が基になっている点では共感できる。しかし一方で、蝦夷文化の形成過程で移住者の数が先住民の人口数を上回る事によって、移民が持ち込んだ文化がそのまま通用すると言う点には疑問を感じる。

我々もそうであるが、たとえ性能の優れた物であっても住む地域や生活習慣において必要とするものは変わってくる。例えば我々の生活には欠かせない移動手段として車が挙げられる。ガソリン車が主流である中でも、環境に配慮した性能の良いハイブリッド型車の開発が盛んに行われているが、だからと言ってハイブリッド車が最も売れているとは限らない。実際2014年の統計では軽自動車の方が売り上げは多い（日本自動車販売協会連合会）。

話を蝦夷に戻すと、蝦夷文化の形成過程で移民によりもたらされた文化が台頭してきた事は、先住民自身が培ってきた文化と移民の文化を併用し、選択淘汰を繰り返した結果、移民の文化の方が東北の地で生活するのに適していたために移民たちの文化を受け入れたと考える事ができる。今まで使ってきた文化をいきなり変える事は難しいことである。無理してまで先住民たちも自分たちの文化を変えようとはしなかったであろう。

一方で、逆に移民たちの立場に立って考えれば、東北北部の地に移住してまでも自分たちの文化を使用した理由はやはり試行錯誤の結果であると言える。移民としてやってきた当初は当然その地で長く暮らしてきた先住民の生活方法に触れる事が考えられる。もし先住民の生活方法が良いと感じれば移民たちの方が文化を改めるであろう。例えば、2章で述べた八幡Ⅱ期を形成した移民と考えられる人々は、猫谷地Ⅱ期の竪穴住居の流れをそのまま受け継いでいる（江釣子村教育委員会 1984）。

そもそも移民たちも自分の生活スタイルの合わない地域には移住を行わないと推定するのが自然である。そのため江釣子にやってきた移民は、自分が以前住んでいた地域と江釣子が良く似た環境を持っていたためにこの地に根を下ろしたと考えられる。そこで江釣子とよく似た環境が、移民たちがもともと住んでいたと仮定される関東・甲信地域に存在するのかを少し見ていく。

江釣子古墳群とよく似た地域として、東京都国分寺市の国分寺崖線が挙げられる。

国分寺崖線とは、太古の昔多摩川が武蔵野台地に侵食することにより誕生した 30 kmにも及ぶ斜面地で、飛鳥時代には多摩川の水利等の理由から国府がおかれ、奈良時代には武蔵国の国分寺や国分尼寺が設置された。また、江戸時代には江戸を支える食料基地された（松本 2005）。そのため、7～8 世紀にもこの地域で食料が生産されていた可能性があると考えられ、江釣子同様、湧水を利用した水田による自給自足により集落が成立する可能性を持っている。また、国分寺崖線から北西に目を向けると瀬戸岡古墳群にぶつかる。

瀬戸岡古墳群は東京都あきる野市、多摩川の支流である平井川の上流に位置する。墳形は江釣子古墳群と類似した川原石積古墳で、自然石積半地下式横穴石室。築造時期が7世紀中ごろから8世紀前半と、猫谷地・五条丸の古墳群とほぼ同時期に作られたものであることがわかる。また、瀬戸岡古墳群での出土遺品は主に直刀、小刀、鉄鏃、須恵器であり、墓構造、地域的に見ても信州からの移住者である可能性が高いと思われる。

以上から、筆者は松本氏の移住者論に対して「移民の存在」という面では同様な事と考えているものの、数を頼りとした文化の形成に対しては違う見解を持つに至った。

3節 本研究のまとめ

本研究を通して明らかになった可能性についてまとめていく。

第2章において江釣子古墳群の世界を復元する事を試みた。その結果

①各集落の特徴 ②集落内の社会構造 ③移民の可能性 ④水田耕作の可能性
について言及するに至った。

江釣子地域は、6世紀から10世紀に亘る約400年の間、集落として存在し続けた。発掘調査等の結果から主に猫谷地地区に各時代を通して一定の集落が存在しており、八幡地区は8世紀後半を境に集落が発展し、また五条丸地区は一大墓地としての特徴が位置づけられた。また、五条丸地区の古墳群が猫谷地集落の人口に対して過剰に多い点に着目し、江釣子古墳群の周辺集落の古墳の存在有無から五条丸地区が周辺集落の族長クラスの集合墓地である可能性を推察した。さらに、猫谷地地区に至っては五条丸古墳群の発展と並行して、猫谷地独自の古墳群を形成している点に加え、その時代に建てられた竪穴住居に関しても他の集落でも類を見ない巨大な竪穴住居が存在した点から猫谷地地域が江釣子地域周辺とした族長連合の盟主的な存在であったと考えられる。しかし、同盟関係が広がる事で各集落間が大きな緩い結合で結ばれていたことを第1章で示した通り、盟主としての支配・被支配と言った関係ではなく、あくまで対等に近い形で結ばれていたのであろう。発掘調査の結果から社会的地位を示す蕨手刀は古墳の埋葬物として発見されているが、鏃などの武器が集落周辺から発見されていない点、一大墓地である五条丸古墳群が江戸中期の新田開発以外で大きく破壊される事がなかった点からも、この地域ではそれぞれの集落が友好的な関係が続いたものと考えられる。

八幡地区の8世紀後半における急激な竪穴住居の増加は急激な人口増加が原因であるとし、集落内での自然な人口増加の流れか、外部からの移民の影響によるものと考察した。判断の根拠としたのが積石塚古墳と遺物である馬具であった。本研究では、この両者が関東・甲信地区の馬飼の文化と共通する点となりこの地方からの移民が流入したと考察した。また、7～8世紀と言えば松本氏の移住者説で言う第2波であり、蝦夷文化に最も影響を及ぼした大規模な移民集団であったとされ江釣子地域にも影響が及んでいた事を示した。

村の存続のために不可欠である糧道については、水田耕作による可能性ものと仮定した。東北北部の太平洋側は元来、作物が育ちにくい黒ボク土の土壌に加え、稲

の発育時期でもある夏のやませ等の影響から稲作には不適な地域であるとされていた。しかし、江釣子地域を流れる湧水群は水温が平均 18℃と稲の成長に必要な限界温度を一定を超えている事に加え、集落を形成している土地が、和賀川の自然堤防上にできた沖積平野で、他の土地よりも比較的多くの養分を含んだ土地である事から集落住民の糧道としての分は水田耕作でまかなえると判断した。さらに本研究では、発掘調査をもとに集落数から各年代の人口を割り出し 1 人あたりの一日に必要なエネルギー量・水田のコメ生産量・玄米の単位当たりエネルギー量・当時の食性に占めるコメ食の比率と言った観点から、水田の広さを考察した。村の景観としては、第 2 章の小括で述べたとおりである。

3 章では、まず筆者の蝦夷論を示し、移民を介して新しい生活文化の導入と猫谷地を中心とした各集落の連合による地域内の平和が特徴づけられると言及した。移民を介しての新しい生活文化の導入に関しては、猫谷地Ⅰ期や八幡Ⅰ期と同時代に存続したとされる岩崎遺跡を挙げ、ここで出土された北海道文化の影響を受けた墓の形式・遺物の種類に大きな違いがみられ、ここから当初は江釣子地域でも岩崎遺跡と同様の先住民が生活していたが、7 世紀後半の猫谷地Ⅱ期を境に江釣子地域は移民の文化を加え発展していったものと結論付けた。各集落の連合については、五条丸での古墳形成を例に挙げて、先に述べた族長連合の友好的なつながりを改めて確認した。

次に、松本氏の移住者論と比較し、蝦夷文化の形成には移民の存在が欠かせない事を確認した。一方では、文化形成時における先住民文化の扱いにおいては先住民と移民との人口比から、移民文化を先住民は受け入れざるを得なかったという松本氏に対し、筆者は地域・住民の生活にとの適合性に着目し、先住民も移民もお互いの生活文化を含めたうえで試行錯誤を行い、現在存在している蝦夷文化は東北北部に適した文化の結果であることを示した。最後に、江釣子と移民の住む地域との共通性についての可能性を国分寺崖線と瀬戸岡古墳群を例に示した。

本研究を通して、江釣子と言う地域が文化的にも社会的にも発達した可能性を持つ事を示したと同時に、分析の結果から松本氏が提唱した移住者説がある程度江釣子地域でも当てはまる事がはっきりとではないものの判明したと言える。

4節 終わりに-今後の展開と展望-

本研究を通して、地理的要因・人の流れ・生活文化・社会構造・食生活と言った点から、当時の江釣子地域でどのような営みがなされていたかを分析した。しかし、発掘調査報告を見ても、これだけの発達した文化が残されているにもかかわらず竪穴住居があまり発見されていない点や、馬具が発見されているのに馬舎跡や馬骨が見つからない等まだまだ未知数ともいえる点が多く残されている。したがって、本研究の分析も多くの部分は可能性に関わる点が多い。本研究の分析がより詳しく行われる為には、発掘調査を増やす等をして、より真実を示すだけの材料がそろうのを将来の問題としてまず挙げられる。

また、移民文化との関連性から東北北部の文化に加え、移民の故郷と考えられる関東北部・甲信地方での生活様式も分析し、江釣子地域との生活文化と比較する事でより具体性の持った説の提唱が行えると考えられ今後、筆者自身が追究していく課題ととらえている。

最後に筆者自身がまだまだ未熟であるためにかなり飛躍した内容になってしまった事をご承知いただきたい。

<参考文献>

- ・江釣子遺跡群―昭和 54 年度発掘調査報告―（江釣子村教育委員会 1980）
- ・江釣子遺跡群―昭和 55 年度発掘調査報告―（江釣子村教育委員会 1981）
- ・江釣子遺跡群―昭和 56 年度発掘調査報告―（江釣子村教育委員会 1982）
- ・江釣子遺跡群―昭和 58 年度発掘調査報告―（八幡古墳）（江釣子村教育委員会 1984）
- ・江釣子遺跡群―昭和 59 年度発掘調査報告―（塚遺跡・五条丸古墳群）（江釣子村教育委員会 1985）
- ・江釣子遺跡群―昭和 62 年度発掘調査報告―（鳩岡崎三館遺跡・猫谷地古墳群・五条丸古墳群）（江釣子村教育委員会 1988）
- ・本宿羽場遺跡緊急調査報告（昭和 47 年度）（江釣子村教育委員会 1978）
- ・本宿遺跡発掘調査報告（（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992）
- ・遺跡ウォーカー [（http://www.isekiwalker.com/](http://www.isekiwalker.com/) 2014 年 12 月 27 日閲覧）
- ・江釣子古墳群とその時代―古代北東北の自立と個性への道― 北上川流域の自然と文化シリーズ（19）（北上市立博物館 1998）
- ・岩手県の歴史（細井計・伊藤博幸・菅野文夫・鈴木宏 共著 山川出版社 2009）
- ・古代蝦夷社会の成立 ものが語る歴史 21（八木光則著 同成社 2010）
- ・蝦夷の考古学（松本建速 著 同成社 2006）
- ・蝦夷と呼ばれた社会 ―古代王権と交流 1 古代蝦夷の世界と交流―（辻 秀人 著 水野 祐 監修 名著出版 1996）
- ・古代蝦夷の考古学（工藤雅樹 著 吉川弘文館 1998）
- ・古代蝦夷（工藤雅樹 著 吉川弘文館 2000）
- ・弥生時代水田の立地と面積―横浜市鶴見川・早淵川の弥生時代中期集落群からの試算―（安藤弘道 著 史学 第 62 巻 1・2 号 1992）
- ・地理院地図(<http://maps.gsi.go.jp/#18/39.291220/141.081212> 2015 年 1 月 16 日閲覧)

- 平成20年度特別展 北上の清水物語 （北上市立博物館 2008）
- 水稲の有機栽培技術（http://www.japan-soil.net/report/h23tebiki_02_L.pdf 日本土壌協会 2015年1月16日閲覧）
- 一般社団法人日本自動車販売協会連合会ホームページ 統計データ
（<http://www.jada.or.jp/contents/data/index.html> 2015年 1月19日閲覧）
- まちづくり条例の設計思想-国分寺条例にみる分権まちづくりのメッセージ-
自治体法務サポート ブックレット・シリーズ3
（松本 昭 著 第一法規株式会社 2005）